

# 東京五輪・パラリンピック 「労働」「原発」 で解決なるか?

2020年の東京五輪・パラリンピックで「不都合な真実」が次々と露呈している。海を泳ぐ競技では水質への懸念の声が続出。試行錯誤の猛暑対策は逆効果という調査結果が出たものも。突貫工事で「ブラック労働」の疑いが浮上し、「復興五輪」には疑問の声がやまない。あと1年で解決なるか。

## 「真実」スイムコースを ただちに「浄化」せよ

「トイレみたいなにおいがする」

「正直、臭い」

8月11日に東京・お台場海浜公園で開かれた水泳のオープンウォータースイミング(OWS)の2020年東京五輪テスト大会。5\*(本番は10\*)を泳いだ選手らが次々とそう訴えた。さらにその6日後の17日、東京パラリンピックのテスト大会を兼ねたバトライアスロンのワールドカップ(W杯)は会場のお台場の水質が悪化したため、何とスイムが中止に。ラン、バイクによるデュアスロンに変更された。

大腸菌類の侵入を防ぐため、入り江の口をふさぐように約400mにわたってポリエステル製の水中スクリーンを設けた。だが、大会関係者によると、16日午後1時の水質検査で大腸菌の値が国際トライアスロン連合(ITU)の定める上限の2倍を超えた。17日午前3時の時点でスイムの中止を決めたという。

15、16両日午前にあつたトライアスロンの五輪選考会を兼ねたテスト大会は水質に問題はなく、スイムは通常どおり実施されていた。大会関係者は仮説として「台風に伴う強い雨や潮目などの要素が重なった」と述べ、下水施設の処理能力

を超えた汚水が流入した可能性を指摘した。「わずかに2mmの雨量でも放流されてしまっています」

こう話すのは、東京の下水道問題についてかねて注目し調査を続けてきた、港区議の榎本茂さんだ。

榎本さんによれば、都内の汚水は各地の水再生センターと呼ばれる処理場を経てお台場などに放流されている。一定の雨量を超える

と放流されるということだが、榎本さんはある可能性を指摘する。

「私の調査では、平均90日に1回放流しています。処理能力を超えたら放流する」としていますが、実際にはいつ放流しているのかわからないのです」

榎本さんは定期的にお台場の放流場所を観察してきた。

「現場に行くと、流したかどうかは『におい』でわかります。放流場所にトイレットペーパーが溶けきれず混じった汚水が充満していました」

榎本さんは早急な「浄化」が必要と訴える。

「汚泥を浚渫したり、きれいな砂を敷き詰めたりして一刻も早くお台場を泳げる海にすることが必要です。東京大会のレガシー(遺産)にもなります」

世界の下水道事情に詳しい、国連環境アドバイザーでグローバルウォータージャパン代表の吉村和就さんは具体策を提言する。

お台場海浜公園に設けられたコースを泳ぐオープンウォータースイミングの選手たち=8月11日

# 「不都合な真実」が続出の2020年 「臭い」「猛暑」「ブラツ」 あと1年



建設が進む新国立競技場＝6月25日

制について高い効果が認められています。来年の本大会においては、万全な体制で臨みたいと考えています」（組織委担当者）  
直ちに水質改善策に取り組んでほしいものだ。

## 「遮熱性舗装」は逆効果？ 熱中症対策を急げ

今夏の五輪テスト大会で

選手たちは猛暑に苦しんだ。

8月11日に海の森水上競技場で開かれたボート。照りつける日差しとじつとりとした湿気で、熱中症のよ

うな症状になる選手が相次いだ。都内臨海部の最高気温は34度を超えていた。英男子選手はぐったりとした様子で、その後担架で運ばれた。表彰式中にふらついている選手もいたという。大会関係者は、

「熱中症の規模としては大きく深刻だ」と危機感をあらわにしていた。

同日、お台場海浜公園でのOWSは開始2時間前の水温が29・9度。レース実施の上限である31度を下回ったとはいえ、選手からは

「通常の23、24度に比べると息苦しいし、脱水してしまいそうで心配」などの声が上がった。4日後、同じ

会場のトライアスロン女子ではランを通常の半分の5<sup>＊</sup>で実施。それでも、仏選手が熱中症の疑いで救急車で運ばれた。

暑さ対策では奇策も講じられた。8月17日に大井競技場で開かれたホッケーでは、選手の体を冷やそうと、水入りの水風呂「アイスバス」が控室に登場。水はこの日だけで約1ト分が用意されたという。

だが、インド選手は「湿度が高いので疲れた。日本の暑さは体温コントロールが難しい」と嘆いた。大会関係者によると、昼にあった女子のインドー日本戦で、ピッチ上の気温は最高で39度。日本の高温多湿の暑さは、

慣れていない外国人選手にダメージを与えたようだ。「今から舗装を変えるのは、間に合いません」  
こう表情を曇らせるのは、医学博士で東京農業大学教授

授の椋村修生さんだ。

椋村さんの調査チームは、東京都が五輪の暑さ対策として整備している「遮熱性舗装」の効果について研究を行い、8月30日に速報値を学会で発表した。

都はマラソンコースを含む都道約136<sup>＊</sup>に、路面温度の上昇を抑える遮熱性舗装などを整備している。約95%に当たる約129<sup>＊</sup>は18年度末までに整備を終えているという。

椋村さんは7月26日の晴天の日、つまり五輪時の天気に近い条件で遮熱性舗装の道路と環境温度を調査。結果は「アスファルト道路より、遮熱性舗装道路のほうが体感温度が高くなり、熱中症などのリスクが高まる」というものだった。

「遮熱性というだけあって、照り返しが強くなってしまふ。日が照っている時間では命にかかわる危険な状態になります。特に地上から50センチが最も高温になる。マラソンコースの沿道にも整備されていますから、小さ